
奈良盆地とその周辺地における 近世石塔の造立傾向について

吉澤 悟

はじめに

本稿は、本書で報告した4つの垣内墓と2つの郷墓の石塔について若干の整理と検討を行うものである。扱う資料は、第1部に報告した東山中の4つの墓地、すなわち、入谷墓地、ドサカ墓地、春明院墓地、ムシロデン墓地の石塔を合計した1,188基と、第2部第2章の平岡極楽寺墓地の石塔1,904基〔五輪塔の部材重複を除く〕、そして第2部第3章の中山念仏寺墓地の石塔9,194基である。その総計は1万2千基を上回る膨大な数量となり、石塔の統計的検討においてはそれなりの精度が期待できると思われる。これらは各章においてそれぞれの傾向が整理されているものの、比較によって各々の特性を見極め、一般性への洞察をもつ余地が残されている。幸いなことに、調査地は奈良盆地の東西端の2地点と、そこから東に山を越えた山村部にまたがっており、流通や生業、あるいは歴史の異なる生活圏に根ざした石塔の傾向を横断的に眺めることが可能である。

近世石塔の重要な特性の一つに、広域普及性と造立者層の拡大が挙げられるが、そのあり様は地域によって一通りではない。石塔数の増減や造立時期の遅速、あるいは特定形式への偏向などが、今般の調査地でどの程度の差となって現われているのか確認し、その背景について若干の整理を試みたいと思う。

なお、本稿の前半部は、既出の調査概報に掲載した整理部分に追加・改訂を行って作成したものである〔吉澤 2001〕。扱ったデータと記述内容に若干の改正があることをあらかじめお断りしておく。また、後半部は、近世の代表的な石塔形式である舟形と櫛形について、中山念仏寺墓地の資料からその交代劇の背景を追ったものである。未だ十分な咀嚼を終えたとはいえないが、ひとまずの整理結果を参考に供すことにしたい。

①……………東山中と奈良盆地の石塔比較

東山中の吐山地区の墓地は、小集落単位で営まれた垣内墓ないしは村墓の一種である。奈良盆地内に形成された巨大な郷墓に比べれば、石塔の数は著しく少なく、個々の墓地ごとでは比較に適さない。よって以下では入谷、ドサカ、春明院、ムシロデンの4墓地を一括して扱い、石塔の合計数

を東山中の石塔群として、盆地内の2つの郷墓と対比させることにする。また、郷墓の名称については、野崎清孝氏の先行研究に従い、平岡極楽寺墓地を平岡墓地、中山念仏寺墓地を中山墓地と簡略化して呼ぶことにしたい〔野崎1973〕。

a. 石塔造立数の変化

図1は東山中、平岡墓地、中山墓地の3地点の石塔造立数を20年間隔で示したものである。母数に大きな違いはあるが、石塔の増減傾向を概観することは十分可能であろう。

まず、東山中の石塔についてであるが、16世紀中葉に少数の五輪塔の造立によって始まり、17世紀後葉から俄かに数を増している。以後は全体的には右肩上がりに増加するように見えるが、より仔細に見るならば、18世紀前葉に第1のピークがあり、18世紀後葉の僅かな減少期間を挟み、20世紀前葉に第2のピークを迎えている様子を把握できる。

平岡墓地の石塔は、16世紀前葉に五輪塔および有像舟形から造立が始まるが、やはり中世の段階は僅かな数に留まっている。16世紀末から17世紀初頭には完全な空白期間も存在する。17世紀中葉から徐々に数を増やし、17世紀末に第1のピークを迎えている。19世紀初頭に大幅な減少を

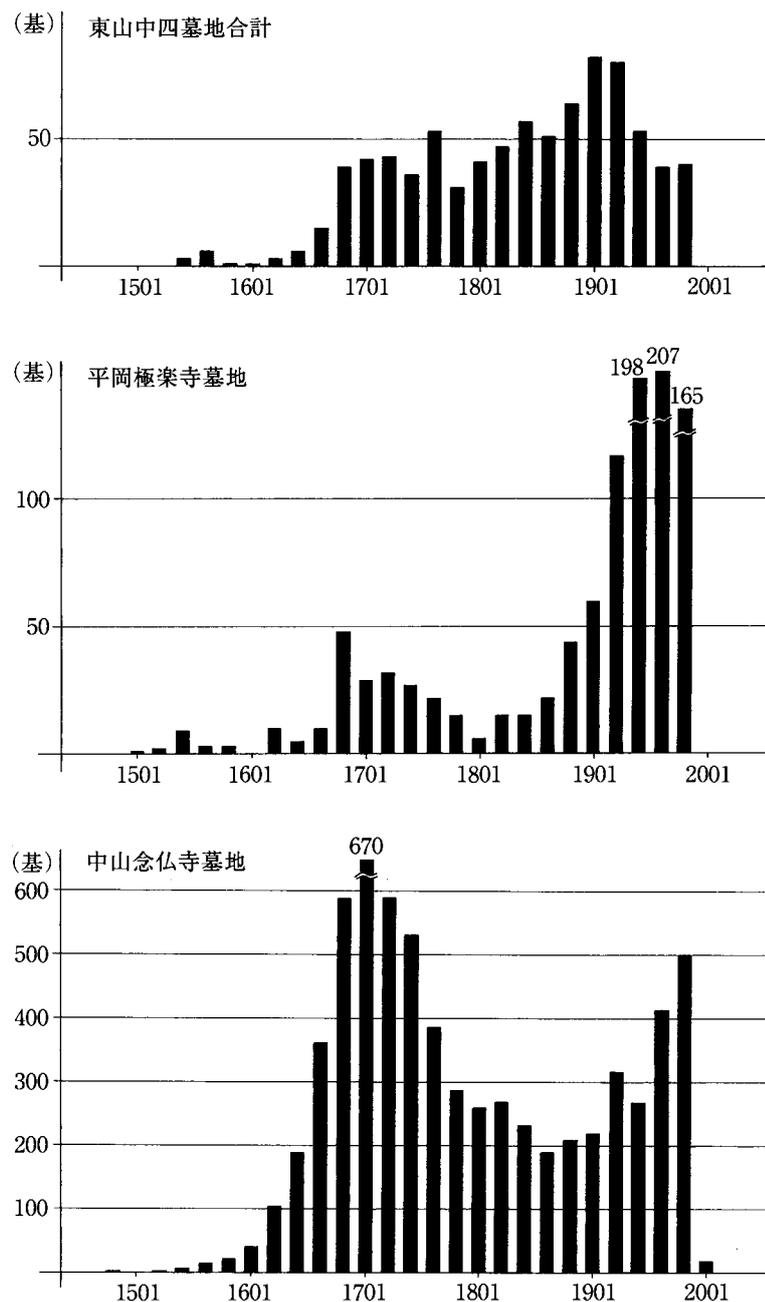


図1 石塔造立数の変遷

みるが、以後は急速に増加を続け、20世紀後半が第2のピークとなっている。

中山墓地の石塔は、16世紀前葉に五輪塔、中葉に背光五輪塔が出現し始めるが、16世紀代はやはり僅かな数でしかない。急速な増加をみるのは17世紀前葉から中葉にかけての頃であり、18世紀初頭の第1のピークまでは強い右肩上がりの増加傾向を示す。その後、19世紀前葉までに急速な減少を辿り、明治前半の19世紀中葉を底にして、20世紀後葉の第2のピークまで再び増加の一端を辿る。

以上の三者の傾向を比較すると、いずれも石塔の初現期が16世紀前半代であること、第1のピークを17世紀末から18世紀初頭に迎えていること、その反動ともいえる減少時期が18世紀後葉から19世紀前葉頃に来ること、そして再び増加しておよそ近代に第2のピークが訪れていること、などの諸点で類似した傾向にあることが指摘できる。よって、おおむね石塔の造立数の変遷は、S字を横にした曲線で描かれることになる。ただし、その曲線の深浅や山谷の間隔はそれぞれに違いがあり、必ずしも相似形にはなっていない。

三者の曲線で最も良く一致しているのは、17世紀後半から18世紀初頭までの増加期間であり、一般的には小農自立、家制度の確立などに伴い石塔造立の意識が高揚したと解釈されている。逆に最もずれの部分としては、第1のピーク後に訪れる減少部分で、その時期や幅は各者まちまちである。最少数を記録した時期に絞って三者を比べるならば、東山中では18世紀末、平岡墓地は19世紀初頭、中山墓地は19世紀中葉とずれており、数量が低迷している時間幅も後者ほど大きくなっている。この近世後期から近代にかけての減少期間は、山城木津惣墓 [坪井 1939] や大阪府狭山市内の事例 [市川 2002] でも確認されており、より広域で起こっている何らかの現象を反映したものと推測される。一つの解釈としては、石塔1基に多人数の戒名を刻むものが増えることで、石塔の全体数が低下するということが考えられるが、この点については次節で詳細に検討することにして、ここでは違いの存在を確認するに留めておきたい。

他に三者の間の特徴的な違いを探すならば、第2のピークが東山中では20世紀初頭の大正年間頃に訪れているのに対し、盆地内の郷墓ではより遅れて20世紀後半の高度経済成長期となっていることが挙げられる。郷墓の場合に限って言えば、この第2のピークをもたらした原因は、各家が墓所を分割ないし新規分譲によって保有するようになり、それぞれに角柱形石塔を造立させているためである [第2部第3章参照]。特に戦後の石塔産業の進展は著しく、使用石材にも御影石や庵治石、あるいは外国産の石材など光沢のある美観に適った石材が多用されるようになる。東山中の墓地にこうした現象が訪れていないのは、昭和以降の新規入植者が少ない一方、都市周辺への転出者が増えるという山村部の一般的傾向を反映しているためであろう。

b. 主要形式の出現時期

次に、石塔の主要形式が各墓地でどの時点で出現しているか、確認しておくことにしよう。まず背光五輪塔であるが、東山中で最古のものは春明院墓地の天文十七年(1548)銘のものである。同墓地には続いて元亀二年(1571)、(天)正三年(1575)、天正十四年(1586)銘のものが存在している。平岡墓地では、永禄三年(1560)のものが1基と天正年間(1580年代)が2基確認されている。中山墓地では、天文三年(1534)天文九年(1540)が各1基、以下弘治・永禄年間(1550

年代)までのものが6基確認されている。これらから、背光五輪塔は、いずれの墓地でも16世紀中葉に収まる時期から出現していることが分かる。

舟形もしくは駒形の出現時期については、東山中では17世紀中葉から舟形が、平岡墓地では17世紀前葉から駒形、中山墓地では17世紀初頭から舟形がそれぞれ出現している。いずれも近世の早い段階から出現しているが、東山中にやや遅れが認められる。櫛形については、東山中は17世紀後葉、平岡墓地と中山墓地では17世紀中葉から現われており、やはり東山中が遅れる傾向にある。ただし、櫛形が本格的に使われはじめるのはいずれも18世紀に入ってからのものであり、特に平岡墓地では早くも18世紀初頭にピークを迎える特異なあり方をしている(後述の図5参照)。

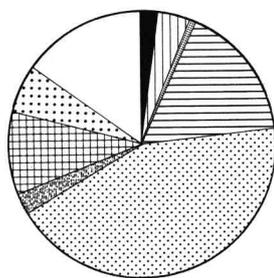
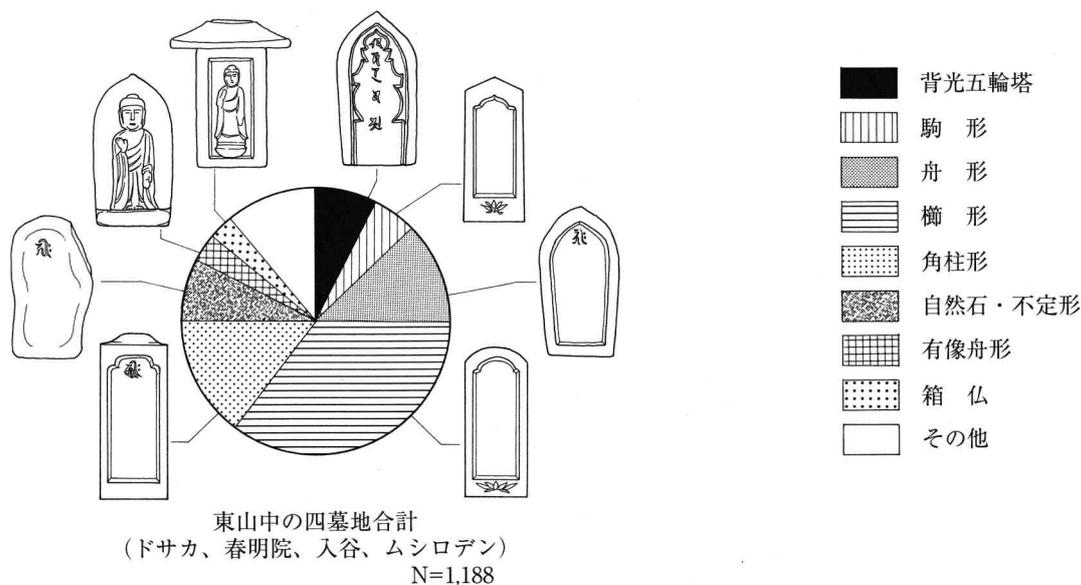
角柱形は、東山中では19世紀初頭に尖頭角柱や丸台頭角柱が出現している。平岡墓地と中山墓地では18世紀中葉から角台頭や丘状頭、尖頭、有突起角柱などがバリエーションをもって出現しており、東山中に比べて約半世紀ほど早い。

以上から、中世末の石塔はどの墓地でもほぼ同時期に出現しているが、近世以降は盆地内よりも山村部の方がやや遅れる傾向にあることが分かる。これは母数の違いによる誤差の可能性もあるが、石塔形式の流行ともいべきものは、より需要度の高い盆地部から広がっていたと想定するのが妥当であろう。

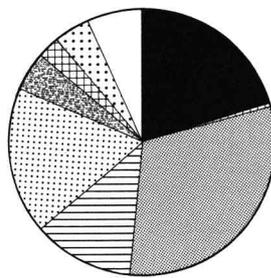
c. 石塔の形式構成

図2は3地点の石塔群について、形式別に数量割合を示したものである。一見して三者三様であり、最も大きな割合をもつ石塔形式がそれぞれに違っている様は印象的である。東山中では櫛形、平岡墓地は角柱形、中山墓地では舟形が最多を占めているのは、それぞれの隆盛時期に墓地が頻繁に利用されたことを示し、ある程度は時間差とも解釈できる。地域性の視点から重要と思われるのは、背光五輪塔の割合が平岡墓地で極端に少ないこと、あるいは舟形と駒形の割合が平岡墓地と中山墓地で逆転していること、などの偏向性であろう。どの墓地でも一通りのバリエーションが存在しており、特定形式の知識や技術の欠落はなかったはずであるが、その中でも地域事情に適した形式が積極的に選び抜かれていたということである。

背光五輪塔は中世末から近世前期の石塔を代表する形式であるが、その分布の中心は奈良盆地北部にある。特に春日山麓で採取される輝石安山岩(カナンボ石)を用いたものが典型的で、京都府南部から奈良盆地北部にかけては濃密に分布している。中山墓地はそこからかなり南に逸れた位置にあるが、一定量の安山岩製の背光五輪塔が入っており、またより早い段階から近在の龍王山産の花崗岩で作ったものも多数使われている。東山中でも中山墓地ほどの割合ではないが、安山岩と在地の花崗岩製とみられる背光五輪塔が一定量存在しているのを確認している。一方、盆地の南西端に位置する平岡墓地には、この安山岩は全く届いておらず、背光五輪塔は近在の葛城山で採れる石英閃緑岩によって作られたものが僅かに存在するだけである。これに代わる同時期の石塔としては、古手の有像舟形や、凡例中にはないが一石五輪塔(平岡墓地では44基、中山墓地では4基)や板碑形(平岡墓地では31基、中山墓地では僅か1基)などが挙げられる。平岡墓地ではこれらが背光五輪塔の希薄さを補完するかたちで存在していたのであり、逆にいえば中山墓地では一石五輪塔や板碑形は極端なまでに影が薄い存在となっている。



平岡極楽寺墓地



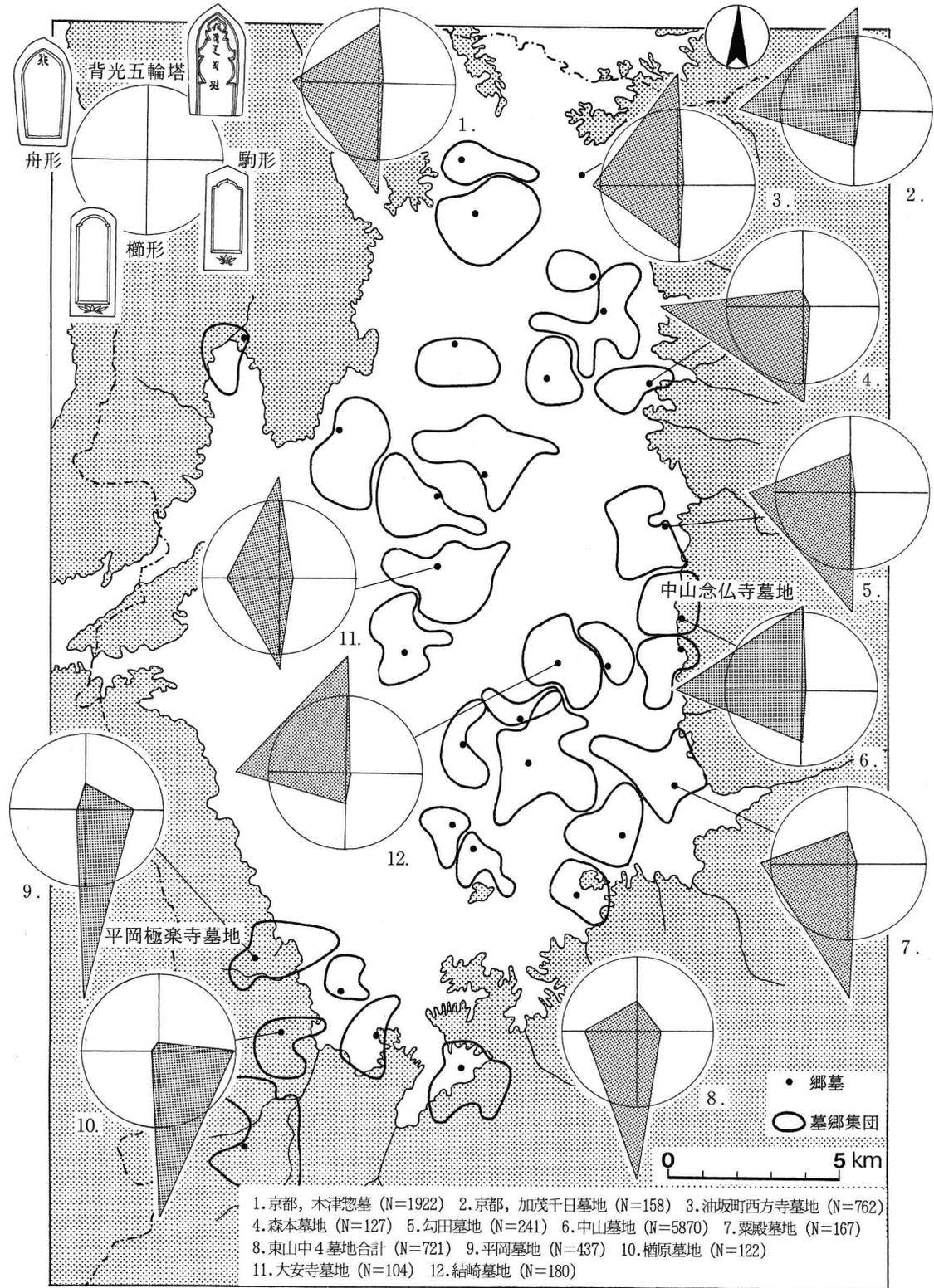
中山念仏寺墓地

図2 各墓地における石塔形式の割合

舟形と駒形については、共に近世半ばを代表する形式であり、どの地域においても近在の石材で一般的に作られている石塔である。これが平岡墓地と中山墓地で背反的に用いられているのは、背光五輪塔の場合と同様に、盆地の東西を二分する地域性を表明するものと言することができる。

図3は、主要石塔4種について、盆地内の墓地をサンプリング調査した結果を示したものであるが、盆地の東側では揃って舟形が卓越している一方、南西端の平岡墓地や檜原墓地では駒形に傾倒している様子がよく分かる。駒形は、肩部に稜線をもつ尖頭形の石塔であるが、板碑形と形態的に類似しており、額部の二条線を除けば長身の駒形は板碑形と同形態である。盆地南西部においては、仏像光背の形を彷彿とさせる舟形よりも、この板碑形のイメージが石塔作りに強く残存し、造立者の嗜好にも叶うものとなっていたことが推測される。反対に盆地の東側では、背光五輪塔から舟形へと、光背形の外形線をもつものが定着し易かったのであろう。

盆地内には北部に春日山、東部に龍王山、南西部に葛城山などの主用な石材産地があるが、各地の石塔はそれぞれ近在の産地で専門的に活動している石工の影響を少なからず受けると推測される。盆地の東西を二分する上記の偏向性は、使用石材の違いともおよそ合致しており、おそらくこの産地や石工の違いが地域性の派生に大きな役割を果たしている可能性が高い。東山中の石塔にこうし



注：図中の円グラフ状のものは、各墓地における背光五輪塔、舟形、駒形、櫛形の4種の割合を示したものである。円の半径は、4種の石塔を合計した数の30%を示しており、仮に円弧に接した二等辺三角形が描かれるならば、その墓地では3種の石塔が3割ずつ存在していることを意味する。例えば中山墓地では、4種の石塔の合計が5,870基あり、その中で舟形は2,848基、49%を占めていた。一方、背光五輪塔類は1,882基、32%、駒形は28基、0.5%、櫛形は1,112基、19%であった。従って、中山墓地のグラフは舟形に大きく偏った左向きに描かれる。他の墓地も同様の操作を行って作成したものである。なお、1. 木津惣墓、6. 中山墓地、8. 東山中合計、9. 極楽寺墓地以外については、筆者がサンプリング調査を行った際の数値であり、石塔の実数を示すものではない。

図3 奈良盆地及びその周辺地における主要石塔の割合〔吉澤2001を改変〕

た強い偏向性がみられず、むしろ中庸的なあり方を呈していたのは、盆地内に生じた背反性とは無縁であったためと考えられ、等価に奈良県周辺の典型的形式が受け入れられた結果と解釈されよう。

d. 使用石材の変化

次に石塔に使用された石材の種類について、時間的な推移をみておきたいが、残念ながら東山中の調査では石材の判断を行っていない。現時点では盆地内の郷墓を比較するに留めざるを得ない。

平岡墓地と中山墓地は前述の通り、共に近くに石材産地を抱えており、平岡墓地は葛城山から採れる石英閃緑岩、中山墓地は龍王山周辺からの黒雲母花崗岩を主な石材としている。両墓地とも初期の石塔から近在の石材を使用しており、平岡墓地では18世紀前半まで、中山墓地では19世紀後半まで、全石塔の過半数がこれらを使用している。

これに対して、春日山付近で採取される輝石安山岩（カナンボ石）や大阪湾南岸の山地から切り出される和泉砂岩が、時期を追って使われるようになる。輝石安山岩は前述の通り、京都府南部から奈良盆地北部にかけて多用される石材で、中山墓地では1570年代より使用が始まり、17世紀前半に約3割程度まで増加している。ピーク時に8割以上を占める木津惣墓とは、使用割合に大きな差があるものの、中山墓地ではほぼ足並みを揃えた使用傾向にあると言える。一方、平岡墓地ではこの安山岩は皆無であり、依然として在地の石英閃緑岩が多用されている。反対に、17世紀後半から始まる和泉砂岩の使用については、平岡墓地の方が中山墓地よりも顕著である。使用開始時期については両者だけでなく木津惣墓を含めてもほぼ同時であるにもかかわらず、平岡墓地では18世紀後半と19世紀の後半には全石塔の6割を占める高頻度で和泉砂岩が使用され、対する中山墓地では19世紀後半になってようやく5割弱の使用がみられる程度である。

こうした使用石材の違いを生ずる要因は、石材流通ルートとの関係、そしてそれを加工する石工の発達によるところが大きいと思われる。盆地北東部で採取される安山岩は、それが多用される近世前期の段階では、下ツ道や中ツ道を下る陸上搬送にも程度があり、同時に硬材加工に長じた石工の定着も鈍ることで、南西部に行くほど使用頻度が下がる結果を導いたのであろう。特に葛城山や金剛山より採取される石材に対する強い依存度がそれをいっそう鈍らせていたと考えられる。一方、和泉石は大阪方面から木津川や大和川を介して奈良盆地に搬入されたと思われるが、近世の中ごろにはそのルート沿いにいち早く市場が開け、盆地南西部へ大量に流入したと考えられる。より離れた盆地東側には、近世後期の問屋の発達によって、やや遅れながらも供給が拡大していった過程が想定され得るのである。

小結

以上に指摘してきた諸点をまとめるならば、およそ次のようになる。

- ① 石塔の造立数は、墓地ごとに非相似形の横S字形の曲線を描いて増減する。
- ② 17世紀後半から18世紀初頭の間に石塔造立数が第1のピークを迎える点は各地に共通する。
- ③ 主用な石塔形式の出現時期は、盆地内はほぼ同時期であるが、山村部ではやや遅れる傾向にある。
- ④ 盆地内の石塔形式の選択性には東西の地域性があり、石材産地の違いが影響していると思われる。

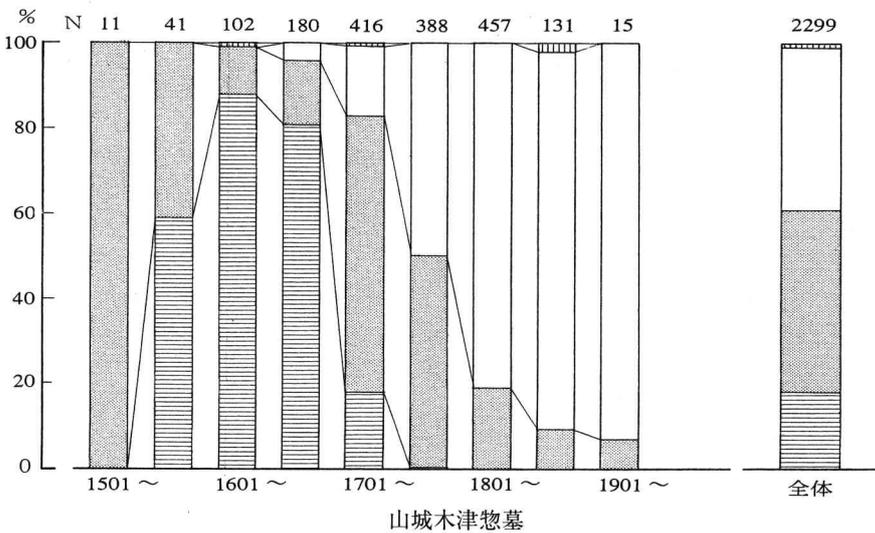
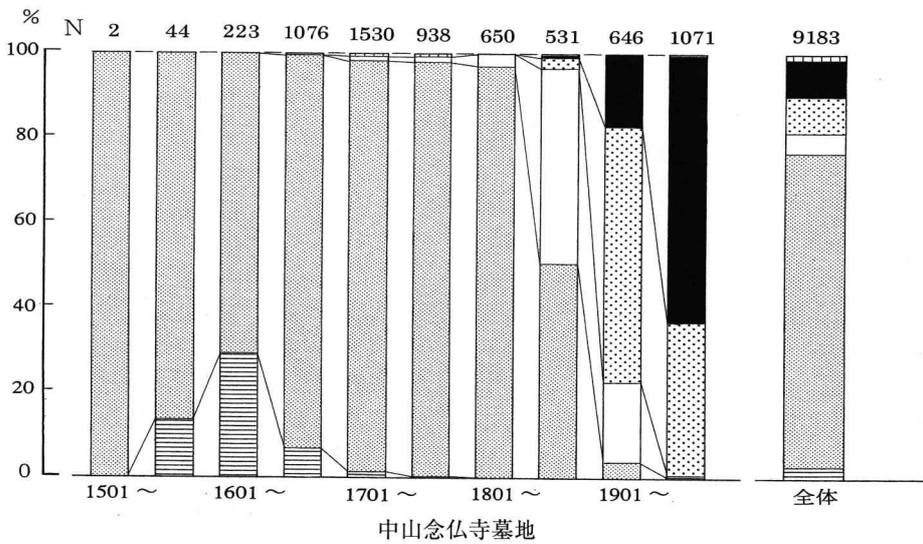
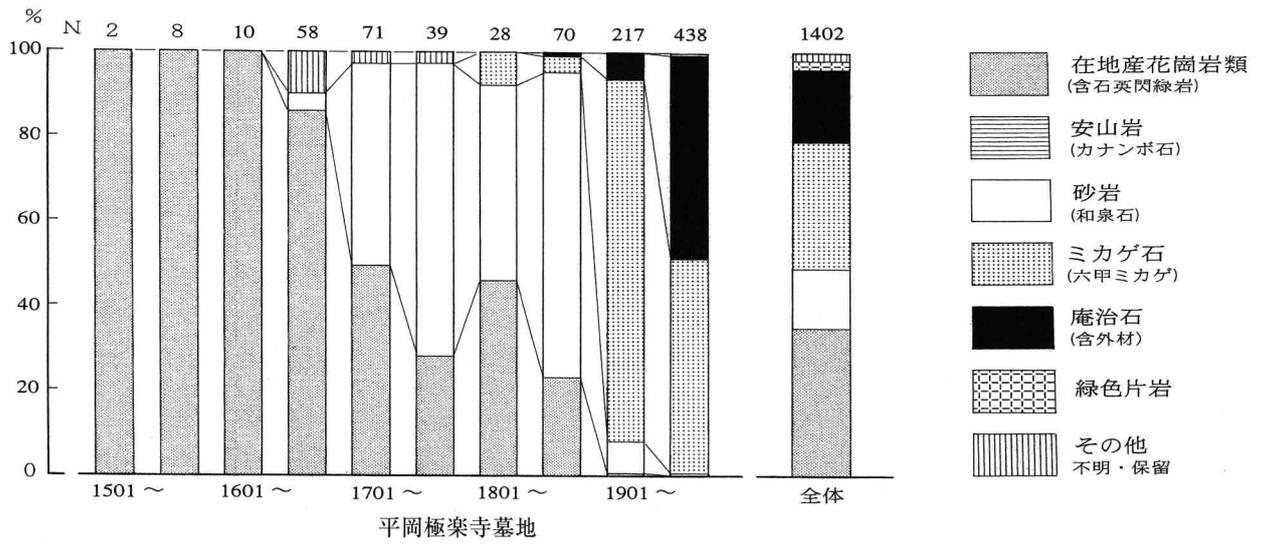


図4 使用石材の比較

る。

⑤ 石材の変遷も盆地内に地域性がみられ、流通ルートとの強い関係が想定される。

石塔が立てられる背景には、造立者の嗜好や財力など「使用する側」の事情と、石材産地や石工の手腕、流通ルートなど「生産する側」の事情の、大きく分けて二つの事情が重なっていると思われる。①や②は主に使用側の事情によって生じるものと考えられるが、各地に共通した動きと異なる動きのあることが指摘でき、石塔造立者層の拡大も一様ではなかったことが知られる。④と⑤、あるいは③の一部については石塔の地域性を表すものであるが、これは生産側の事情によって生じるところが大きいと考えられる。近世石塔の広域普及性は、この生産側の「量」的な制約を受けながら進んでいたものであり、画一的に同じ形の石塔が普及していたわけではなかったということである。

こうした整理は、もちろん大局的なものでしかなく、個人の信仰心や財力が特定の石塔形式や石材を決定する場合もあるであろう。えてして個々の石塔には、上述のような統計的把握になじまない独特の風貌や趣きがあり、それがこの地の民俗的特性を反映している可能性もある。しかし、石塔が自作品でない以上、使用する側の選択肢には自ずと限りがある。石塔の形や材質に関する限り、各地の特性はあくまで生産する側の事情の上に、あるいはそれとの折り合いの中で現出していると考えておくのが妥当であろう。

②……………近世後期の石塔の変化

今度は少し視点を変えて、石塔を「使用する側」の事情を中山墓地の資料の中に追いかけてみたい。

a. 石塔造立数の変化の一因

先に指摘したように、石塔造立数の変遷は、①横S字曲線を描く、②曲線の山と谷の年代的位置や幅は墓地によって異なる、の2点を指摘しておいた。特に後者は奈良県周辺、ないしは盆地内という比較的小さな地域における違いであり、飢饉や悪疫、経済破綻など広域で規模の大きい社会変動による死亡者の増減を反映したのではないと考えられる。と同時に、石材の枯渇や流通の途絶、石工の変転などを想定する余地がないことも、前述の傾向から明らかである。それでは、この違い、特に18世紀後半から19世紀代に起きている石塔の減少は、一体、何に起因するものであろうか。

図5、6は、この時期に主体となる舟形ないし駒形と櫛形の増減を、全石塔の造立数の変遷グラフに投影したものである。図をみるかぎり、どこの墓地でも17世紀末、18世紀初頭の第1ピークは舟形・駒形の最も隆盛する時期にあたっている。そして、第2のピークは東山中では19世紀初頭の櫛形の最隆盛期、平岡墓地では20世紀前半の角柱形の盛行期にあたるが、よくみると櫛形が最も多い18世紀前葉にもごく小さなピークが存在している。中山墓地でも同様で、19世紀初頭に僅かな高まりを認めることができる。従って、石塔造立数の変遷は、厳密には横S字ではなく、舟形ないし駒形、櫛形、角柱形、の3つの形式の隆盛期を3つの山とし、その間に2つの谷が入る波形の曲線で描かれることになる。ただ、東山中のように近代の人口増加が少ない地域では角柱形の

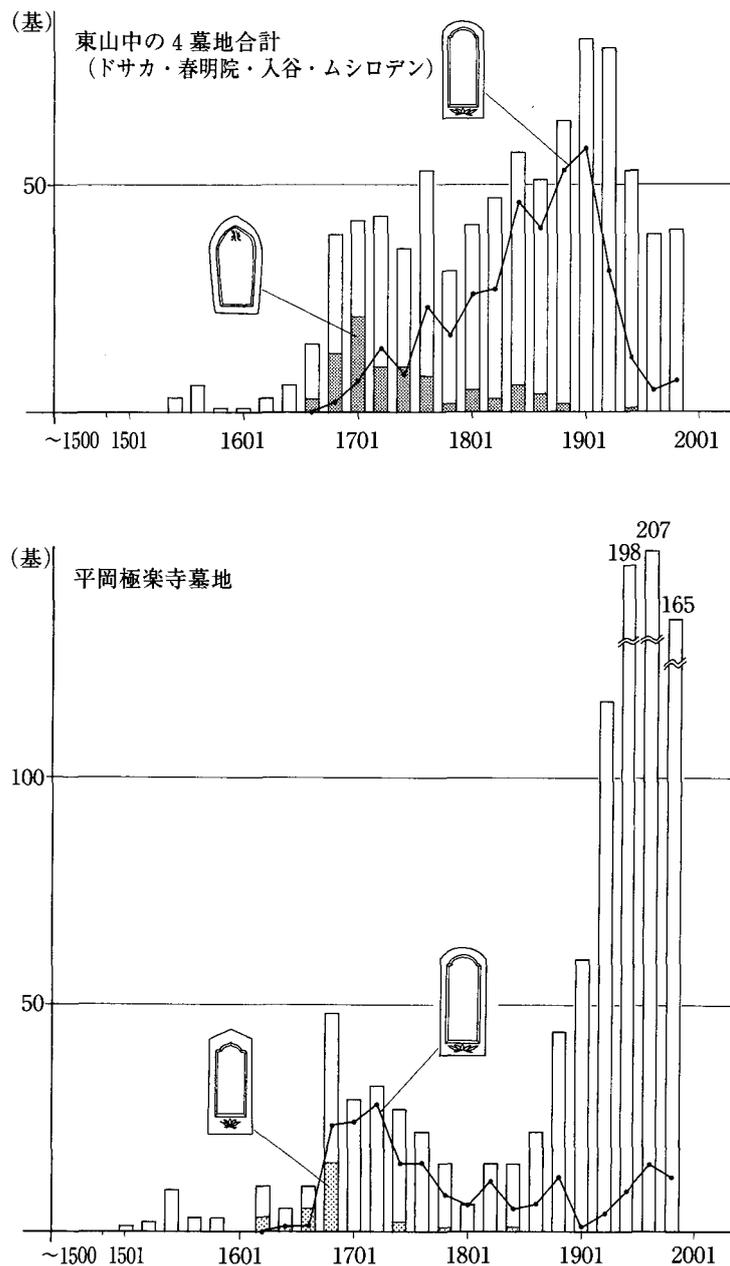


図5 東山中4墓地および平岡極楽寺墓地における舟形・櫛形の盛衰

式の変化に応じて生じていた、ということが可能となる。

b. 舟形と櫛形の戒名の違い

中山墓地では18世紀末から19世紀前半にかけて石塔の数が急激に落ち込んでいるが、それはちょうど舟形から櫛形へと形式が移行する時期にあたる（最も数が減る19世紀中葉は、次の段階の櫛形から角柱形への移行期であろう）。この交代劇の裏には何があったのか、戒名の格や記載人数の変化を頼りに考えてみよう。

山（第3のピーク）がなく、逆に平岡墓地のような櫛形の隆盛期が異例なまでに早く数量も少ない地域などは舟形・駒形の山（第1のピーク）に隠れてしまい、見かけ上は山が2つで横S字に見えるということなのである。

全国各地の墓地でもこの様子は確認される。図7は代表的な石塔調査事例から作成したものであるが、それぞれに石塔造立数の変化曲線が異なるものの、ほぼどのピークにも舟形・駒形と櫛形の隆盛期が重なっている様子がわかる。さらに重要なことは、いずれの場合でも谷の部分には舟形・駒形から櫛形へ移行する時期に相当しているということである。石塔の数が増えることと、その時期の代表的な形式が増加することが一致するのは当然のようではあるが、石塔の数が減る時期に形式が入れ代わる必然性はない。よって、石塔数の変化の波は、ほとんど形

表1, 2は、舟形と櫛形に刻まれた戒名の種類と数を年代ごとに整理したものである。本編報告部分で指摘しているように、戒名の格は時期を追って高まる傾向にある。「信士・信女」から「禅定門・禅定尼」、「居士・大姉」へとより高格とみられる位号が使われるようになり、また、同じ位号

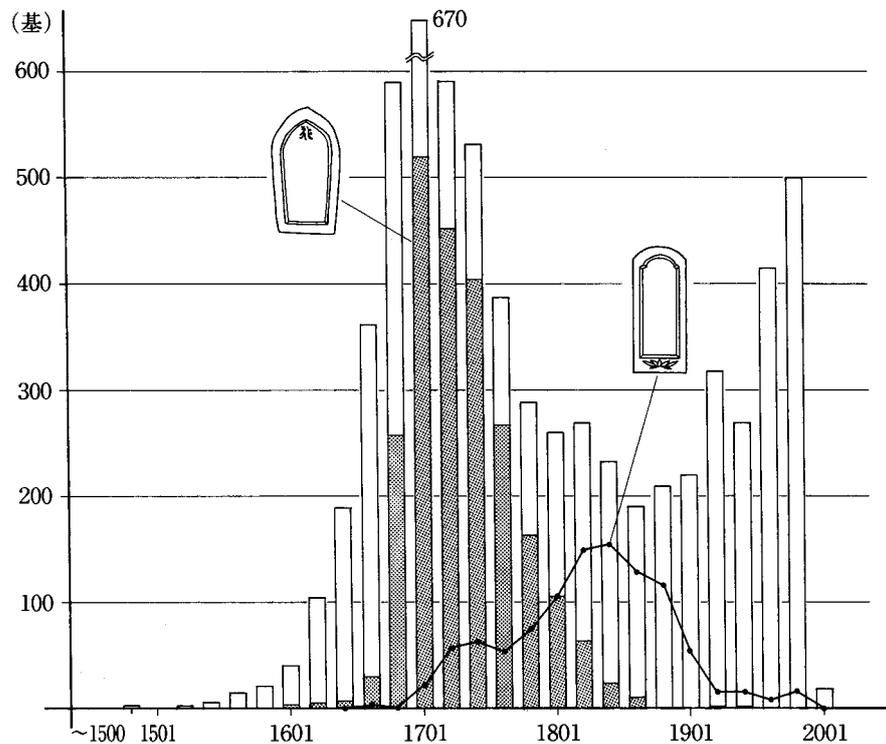


図6 中山念仏寺墓地における石塔数の変遷と舟形・櫛形の盛衰

の中でも2文字+「信士」から4文字+「信士」へと字数を増やして行く傾向が指摘されている(第2部第3章および関口論考参照)。従って、舟形よりも時代の新しい櫛形の方が、相対的に格の高い戒名を用いるものが多いと容易に予想される。そこで、これを念頭に置きながら、同時期の舟形と櫛形でどのような戒名が使われているかを観ておく。

18世紀代において最も多いのは舟形、櫛形ともに「信士・信女」である。舟形は18世紀中葉を境に2文字の「信士・信女」から4文字のものへと数を移行させており、この段階で一度高格化が進んでいることがわかる。これに対して櫛形は、当初から4文字の「信士・信女」が多くを占めており、舟形よりもやや格の高い様子が伺える。「禅定門・禅定尼」や「禅門・禅尼」についても同様で、舟形は18世紀後半に2文字から4文字に主流が移っているのに対し、櫛形では18世紀前半は希薄であるが、4文字のものが卓越している。また、「居士・大姉」については舟形は僅か2例であるのに対して櫛形は14例あり、明らかに櫛形が多くなっている。よって、18世紀代は、比較的高い戒名を得られた者の中から櫛形の選択がなされていた様子を伺うことができる。それに関連すると思われることに、出家者の石塔も舟形よりも櫛形が多くなっていることは注目されよう。中山墓地では念仏寺の境内に営まれた墓に櫛形の割合が多く、戒名も比較的早い段階から高格のものが認められた(第2部第3章)。寺との縁の深さが戒名の格や櫛形の採用率を上げていた可能性が想定されるところである。

19世紀の前半は、櫛形が舟形を凌駕する時期であるが、戒名の上で劇的な変化はなく、むしろ18世紀後半からの傾向に連続する状況である。両者とも依然として「信士・信女」の数が最も多

く、共に4文字のものが卓越している。ただし、櫛形における「禪定門・禪定尼」の割合が比較的高い点で、やはり舟形とは差が認められる。19世紀中葉以降は舟形が少なくなってしまうので比較にはならないが、櫛形の戒名は4文字の「禪定門・禪定尼」が「信士・信女」を上回り、さらに6文字のものまで出現し、いっそう高格化が進んでいる。

このように、舟形と櫛形の戒名を比較すると、破格な差こそないものの、より優位な者が大勢の舟形に対して差を付けるかのように櫛形を選んでいる様子が伺えるのである。

c. 記載人数の比較

表3は一つの石塔に何人の名を刻んでいるかを、舟形と櫛形に分けて表示したものである。まず、総計をみると、舟形は一基につき一名を刻むものが圧倒的に多く、成人と子供を合わせると全体数の半分以上がこれに該当している。対して櫛形は一名だけのものは3割に満たず、二人一組が5割程度もあり、中でも夫婦と思われる男女一組が全体の4割を占めている。この点で、従来から言われているように、櫛形は「家意識の高まり」を体現する石塔であったといえる〔谷川1989〕。

時期ごとの変遷を辿るならば、まず18世紀前半は、舟形が最も多く使われる時期で、一基に一名を刻むものが6～8割を占めている。櫛形も同様で、まだ数が少ないものの4～6割程度は一名を刻むものであった。多人数を刻むものは比較的少ないが、成人男女一組を刻むものが舟形で0.5～1割程度、櫛形で2割程度である。

18世紀後半は、舟形が約半数に減少し、櫛形は緩慢な増加を続ける時期である。一名を刻むものは舟形では6割前後とまだ多いのに対し、櫛形では3～4割にまで下がり、逆に成人男女一組（約3割）や三名以上を刻むもの（1～2割）が増加している。

19世紀前半は、舟形と櫛形の使用率が入れ替わる時期で、記載人数にも両者の違いがはっきりと表れる時期である。一名を刻むものが舟形では依然として6割前後を保っている一方、櫛形は2.5～3割程度に減少してしまい、代わって成人男女一組が4～4.5割に達して最多数を占めるようになってきている。同時に、同性の成人二名や成人と子供、三名以上を刻むものなども数を増しており、夫婦ないし家族墓的な存在が確立された感を呈する。実数の上でも、19世紀前葉には櫛形が舟形を上回る数となり、それに伴って複数名を刻む石塔が過半数を越えることになる。以後、19世紀後半は、舟形の使用が収束し、櫛形はいっそう複数名の割合が高まるという道を進む。ちなみに、表4は櫛形の側面に刻まれた戒名の数を拾ったものである。「童子・童女」を主としながら、「信士・信女」など家族構成員の中でも若年層か、もしくは比較的低い立場にある者が追刻されているようである。その大半は19世紀に入ってからのものであり、一つの石塔に多人数を盛り込む意識の高まりを示している。

以上から明らかなように、舟形と櫛形の交代時期には、一つの石塔に複数名を刻むものが確実に増えており、特にそれは櫛形の使用において顕著に進められていた。石塔一基あたりに刻まれる平均人数を計算すると、舟形が最も多用される18世紀前葉は1.2人、櫛形が増加する18世紀後葉で1.5人、櫛形が舟形を凌ぐ19世紀前葉で1.7人、櫛形の使用が最高に達する19世紀中葉で1.8人となる（有像舟形や角柱形などを除き、舟形と櫛形のみで計算）。櫛形の多用に伴い、夫婦や兄弟、親子などを一つの石塔に祀る行為が定着・一般化していったということができよう。

表3 中山念仏寺墓地 舟形・櫛形石塔の記載人数の比較

	個 人				二人一組				多 人 数				その他・不明		合 計				
	成人一人		子供一人		成人男女一組		ないし成人男女		子供一人と成人一人と		三人以上成人一人を含む							子供のみ複数	
	舟	櫛	舟	櫛	舟	櫛	舟	櫛	舟	櫛	舟	櫛	舟	櫛	舟	櫛	舟	櫛	合計
1601																			
11	4																	4	4
21			3															3	3
31	2																	2	2
41	2																	2	2
51	2													1				3	3
61	5				2	1	1				1		2	1				12	13
71	10		3		1		1							3				18	18
81	29		7		3								2			10		51	51
91	132	2	33		9								4			14		192	194
1701	142	1	52	1	13	1	3		2		1	2	1		24		238	5	243
11	130	6	48		15	3			2		1		7	1	36	5	239	15	254
21	128	14	31	1	20	5	6	1	5	1	2	1	8		28	3	228	26	254
31	92	12	21	4	20	1	7		8	2	3	3	4	1	27	5	182	28	210
41	97	12	27		27	6	1	3	10		4	1	4		22	2	192	24	216
51	82	13	33		20	7	5	3	5	1	8	4	6	1	22	5	181	34	215
61	69	7	16		11	4	2	5	5	1	2	4	6		12	4	123	25	148
71	51	7	16		16	9	3	3	6	1	5	4	7		6	2	110	26	136
81	38	14	15		12	10	5	1	6		2	2	3	1	9	1	90	29	119
91	24	15	7		10	13		1	1	4	4	2	2	2	8	4	56	41	97
1801	18	15	12	1	6	18		3	3	5	3	4	2		6		50	46	96
11	11	21	8	1	10	21	1	3	4	4	2	5	2		1	1	39	56	95
21	9	17	4	2	3	30		3	4	1		10	1	1	2	1	23	65	88
31	11	20	12	3	6	39			2	3		12	2	3	1	1	34	81	115
41	5	14	8	4		32		3		3		9	2	4	1	3	16	72	88
51	4	18		7	3	40	1	1		3		13	1			1	9	83	92
61	2	17	3	1	1	35		2		7		11				3	6	76	82
71	2	4		2		29		2		1		6				4	2	48	50
81		7		1		23		3		4		15		1		3		57	57
91		5				29		2		2		15				3		56	56
1901		8		1		12		1		1		12		1		3		39	39
11		3				3						4				1		11	11
21		1	2			2						2		1			2	6	8
31		1		1		2						2				2		8	8
41			1	1		1						2				1		4	5
51						4					1		3		1		2	11	11
61											3							3	3
71		3														2		5	5
81		4				2									4		3	13	13
91		1				1												2	2
2001															1			1	1
年号不明	65	4	30	1	24	18	10	2	15	4	35	18	45	2	176	9	400	58	458
合計	1,166	266	392	32	232	401	46	42	78	52	73	166	111	24	410	74	2,508	1,057	3,565

※石塔1基につき1カウント

※成人1人に出家者は含めず

表4 中山念仏寺墓地 櫛形石塔の側面に記された戒名数

	信士・信女	禅門・禅尼	禅定門・禅定尼	釈・釈尼	童子・童女	禅童子・禅童女	嬰孩子・嬰孩女	その他・俗名	合計
1701									
11									
21					1			1	2
31									
41									
51									
61	1				1			1	3
71					1				1
81									
91					1				1
1801	3	1			3				7
11	4				2				6
21	2				4				6
31	4		1		7				12
41	2				3				5
51	3		1		4				8
61	1		4		6			1	12
71	1				1				2
81	2				3	3		5	13
91					6	1		9	16
1901			4	1	4			5	14
11				1	2				3
21							1	3	4
31			4						4
41									
51					1		2	2	5
61									
71			2						2
81				1	8				9
91									
2001									
年号不明	3			2	5				10
合計	26	1	16	5	63	4	3	27	145

※1石塔につき複数カウントあり

ところで、こうした櫛形の性格について谷川章雄氏は、どの地域でも18世紀中葉を前後する時期に強い斉一性をもって盛行しており、「一観面の墓標から多観面の墓標への移行」をもたらす形式と指摘している。また、その盛行の背景に家意識の高揚を挙げており、「近世的な家を単位とした死者供養の一般化」が進んだことを示唆している[谷川1988]。氏のいう家の意識の高揚が、18世紀前葉、享保年間以降より次第に高まってきたものということであれば[谷川1989]、上記の中山墓地の場合はかなり遅れている観があるが、現象の説明としてはおおむねこれになぞらえて理解するのが妥当であろう。

e. 石材の比較

最後に舟形と櫛形の石材について触れておきたいが、両者の交代する時期に関しては、特に意味のある傾向性は認められなかった。両者とも主体となる石材は在地産の花崗岩である。それ以外の石材では、17世紀代から18世紀前半までの早い時期に舟形にのみ安山岩(カナンボ石)がごく僅かに使用されている。また、櫛形では18世紀代に和泉砂岩の使用が7%程度、19世紀後葉に至ってようやく過半数となり、20世紀代ではそれに代わって御影石や庵治石などが主流となっている。なお、前節で指摘したように、中山

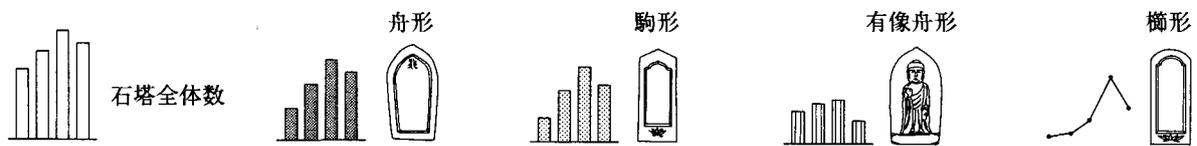
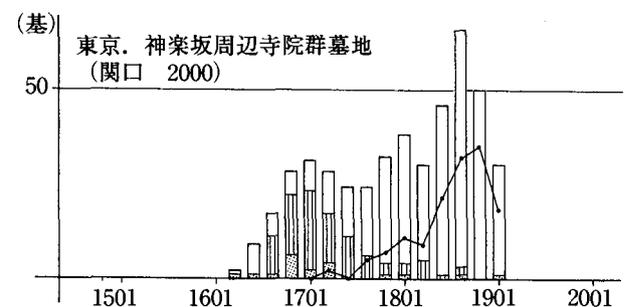
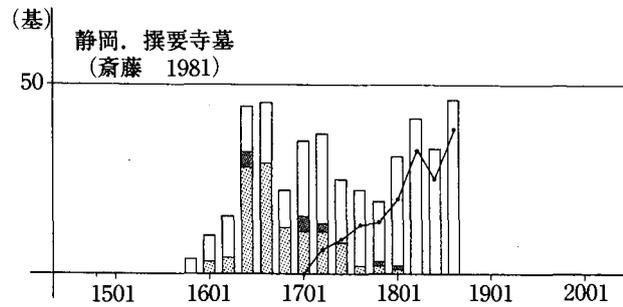
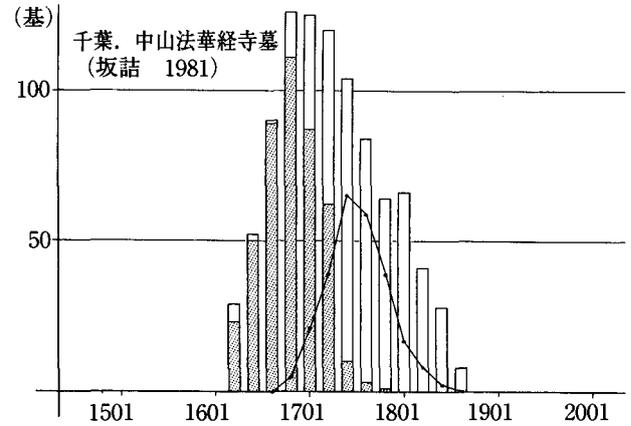
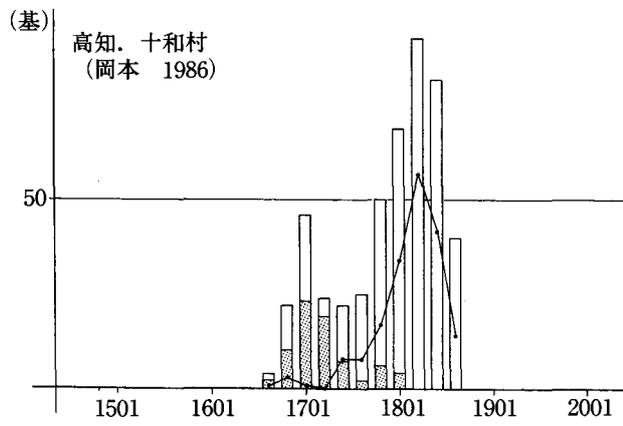
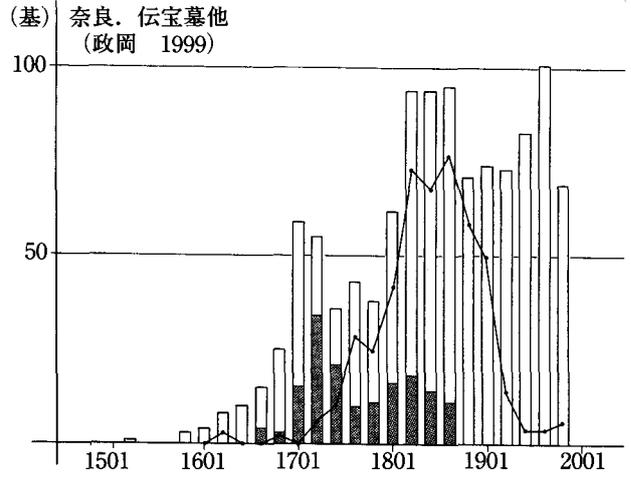
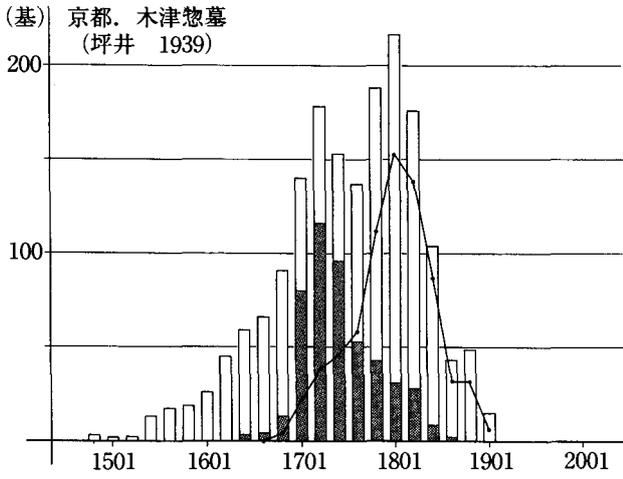


図7 各地域の墓地における舟形・櫛形等の盛衰

墓地は和泉砂岩の流通ルートからやや距離があったため、その使用量は比較的少なく、隆盛時期も遅いという特徴がある。よって、和泉砂岩の流入が櫛形の増加を直接的に導いたことにはならない。少なくとも櫛形の出現期や舟形との交代時期において、石材の違いが形式に及ぼした影響は無視できる程度であり、石工の変化や石材流通の発展を交代劇の背後に想定することはできない状況である。

f. 石塔減少の一因

ひるがえって、石塔造立数が減少する問題に視点をもどすならば、前述の通り、石塔への記載人数が増えることで、造立数は節約されることになり、舟形と櫛形の交代期には一定度の減少が導かれる。中山墓地では目立たないが、その後再び造立数が増加する墓地もあり、それは家意識に裏打ちされた家族墓の定着により、石塔造立者層が新たに拡大したことを示すのであろう。

また、減少の問題に関して見逃せないことの一つに子供の石塔数が挙げられる。子供の戒名を刻んだ石塔は、櫛形の隆盛と共に数を激減させているという事実がある。表3に戻って子供一人の事例を確認してみると、舟形が16%に対し櫛形は僅か3%、成人と子供の一組および子供のみ複数名の場合を含めても、舟形が23%に対して櫛形は10%とかなり低い割合となっている。櫛形が隆盛する19世紀代においてもそれは同様で、舟形が全体数を減らしているにも関わらず、子供の戒名を刻む事例は櫛形よりも多く存在している。よって、櫛形が家族墓的といっても、子供の扱いはかなり軽いものであったと言わねばならない。扱いが軽いというばかりでなく、表1、2の「童子・童女」の戒名数を比べてみて分かる通り、櫛形の隆盛に伴って子供の数が実際に減っており、子供の墓を作る意識が希薄化したとさえ思われるのである。子供だけの埋葬地である「コバカ」の成立が何時まで遡るか定かではなく、中山墓地の周辺にその存在は確認されていないが、あるいはこうした希薄さと無縁ではないかもしれない。いずれにせよ、石塔造立数が減少する原因の一端は、夫婦ないし家族墓的な石塔の増加とは裏腹に、子供の石塔が減少していることにも求められるのであろう。

小結

以上に指摘してきたことを整理すると、およそ次のようになる。

- ① 石塔造立数の変化の波は、形式の変化に対応している。
- ② 18世紀後半から19世紀前半頃に起きている石塔数の減少は、舟形と櫛形の交代期に相当する。
- ③ 舟形と櫛形では、より高格な戒名をもつ者が櫛形を選ぶ傾向がみられた。
- ④ 舟形は一名を刻む場合が終始過半数を超えている一方、櫛形は成人男女一組を主として複数名を刻むものが時期を追って増加しており、19世紀前半に過半数を越えている。これは家意識の高揚、家族墓の定着の過程を反映していると思われる。
- ⑤ 石材の変化は舟形と櫛形の交代劇の直接的な要因とはなっていない。
- ⑥ 石塔造立数の減少の一因は、④に加え、子供の石塔を作る意識の希薄化が指摘される。

さて、これらをもってしても18世紀末から19世紀前半における極端な石塔数の減少が説明し尽くされるわけではない。本稿の冒頭で確認したように、この石塔減少期間は墓地によって異なっ

おり、中山墓地よりも東山中や平岡墓地の方がはるかに早く減少期を迎えている。よって、ここに掲げた諸点はそれぞれの地域の歴史的脈絡に結び付けて再度検証されねばならない。ただ、この期間に村落の中では、家を単位としてささやかな階層分化が進んだことが推測され、より優位な家が高い戒名を得、櫛形の使用率を高めると同時に、夫婦や家族を一つの石塔にまとめて祀る行為を率先していたという経緯が、現時点では想定され得る程度である。その遅速が村墓と郷墓の違い、あるいは寺と家の緊密性などによって生じていた可能性もあり、一層の追究が望まれるところであろう。ともあれ、この減少期に胚胎した石塔観は、次の段階の角柱形において「先祖代々之墓」や「○○家之墓」のかたちをとってより積極的にかつ膨大な量をもって表明されるようになるのである。

おわりに

石塔を検討する視点は多様に考えられようが、ここでは地域性という面的な違いと、数量変化の背後にある質的な違いを雑駁に指摘してきたに過ぎない。石塔の広域普及性と造立者層の拡大という近世石塔の特質を念頭においての作業であったが、さらに別の整理の仕方や、他地域との比較において得られる情報も少なくないと思われる。また、各地の歴史的背景や社会変化への洞察がさらに求められようが、実のところ、調査地や資料数が増えるほど傾向は多岐にわたり、一通りの説明では収まらないことを実感している。今回は、文書調査や民俗調査の成果を活用するゆとりに恵まれなかったが、それらを踏まえた検討は向後の課題とさせて頂き、ひとまずの整理報告を終えることにしたい。

引用・参考文献

- 市川秀之 2002 「先祖代々之墓の成立」『日本民俗学』第230号 日本民俗学会
 岡本桂典 1986 「土佐十和村の墓標について」『立正史学』第59号 立正大学史学会
 斎藤 忠 1981 『撰要寺墓塔群』撰要寺墓塔群調査団・大須賀町教育委員会
 坂詰秀一 1981 「石造塔婆と墓標」『中山法華経寺誌』日蓮宗大本山法華経寺
 関口慶久 2000 「御府内における近世墓標の一様相—東京都・牛込神楽坂周辺寺院群の墓標調査から—」『立正考古』第38・39合併号 立正大学考古学研究会
 谷川章雄 1988 「近世墓標の類型」『考古学ジャーナル』No288 ニューサイエンス社
 谷川章雄 1989 「近世墓標の変遷と家意識—千葉県市原市高滝・養老地区の近世墓標の再検討—」『史観』第121冊 早稲田大学史学会
 坪井良平 1939 「山城木津惣墓標の研究」『考古学』10-16 東京考古学会
 野崎清孝 1973 「奈良盆地における歴史的地域に関する一問題」『人文地理』第25巻第1号 人文地理学会
 政岡伸洋 1999 「奈良盆地における墓郷と墓制—大和郡山市伝宝墓の事例から—」『鷹陵史学』第25号 鷹陵史学会
 吉澤 悟 2001 「奈良盆地における石塔の特徴について—平岡極楽寺墓地と中山念仏寺墓地の比較を中心に—」『近畿地方における中・近世墓地の基礎的研究』国立歴史民俗博物館

(元国立歴史民俗博物館COE研究員)

(2003年6月26日受理, 7月15日審査終了)